

氏名(本籍)	かぶ た まさ ひこ 株 田 昌 彦 (石川 県)
学位の種類	博 士 (芸 術 学)
学位記番号	博 甲 第 4124 号
学位授与年月日	平成 18 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	油彩画における描写法の構造についての考察 - 素材特性を踏まえながら -
主 査	筑波大学教授 博士 (芸術学) 五十殿 利 治
副 査	筑波大学教授 玉 川 信 一
副 査	筑波大学助教授 博士 (芸術学) 岡 崎 昭 夫
副 査	埼玉大学助教授 博士 (芸術学) 小 澤 基 弘

### 論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、油彩画を実際に制作する者としての視点に立脚しつつ、制作法をめぐって考察を進めるものであり、作品論や作家論とは異なる研究を試みるものである。とくに中心的課題となる描写法について、質感、量感などその基本的な要素とともに、素材特性にとくに配慮して、各章において、実見した西洋古典絵画から自作まで豊富な具体例に論及しつつ検証を行っている。

本論文は序章、一章から五章、終章、さらに図版、参考文献等から成る。

序章においては、論文の意図と構成について述べる。

第一章においては、まず油絵具の性質について論じる。その基本的性質、画用液、基底材と下地など、油彩画における根源的な素材特性に関して触れ、描写法と素材の使用法について考察するとともに、必要とする効果を実現するための素材選択における要点を明示する。つぎに、油彩画における描写法と技法効果について、論じ、重層、暈し、グレージング、インパストについて検証する。重層では、透明性を生かした補色や同系色によるトーンの表れ方、下層の乾燥状態の違いによるタッチの表れ方を示す。暈しについては、油絵具の透明性や乾燥の緩慢さという特性が大きく技法に関与している事に触れ、二つの方法における効果の違いを示す。グレージングについて用途を例示し、素材面としてワニスの重要性について触れた。インパストについては質感への適用の事例、樹脂の混合における効果を論じる。

第二章では量感、質感、輪郭について論じる。量感と質感は反比例のような関係にあること、また、輪郭は量感と質感それぞれに関係し、画面上におけるバランスを図る役割があること、このような基本要素の相互関係は描写法の根幹を成し、描き手の対象の捉え方が反映することを考察する。次に、光の設定(方向と強弱)について検証する。光の扱いとして、主題や制作意図の差異に起因する光源や基本要素の違いを示す。ついで、彩色やマチエールにおける素材特性の表出を検証する。彩色に関しては、文献を基に彩色法を分類し、それぞれについて作例を示して考察する。明暗によって決められる色彩配合では、三つの主要な方法(明部から暗部への重層、明部の描き込みとグレージング、混色)について実践例を挙げる。色の彩色段階によって決められる捉え方では高彩度の色彩の導入法と素材特性の関係について検証する一方、『弱い色彩配合』

では、空間感の統一が容易に行える特質を指摘する。マチエールと描写法の関係については、質感への従属性や絵画空間の統一性に着目する。

第三章では、描写法において空間感を確保する場合に必要な要素について考察する。基本単位となる図と地の関係について、図の部分のタッチを物理的に上層にする方法、地の部分における透明性を高める方法がそれぞれの領域区分に重要であることを示す。カラヴァッジョ作品に見られる図と地を検証し、絵画空間の構築に描き手の意図的な操作が加味されていることを指摘する。つぎに、風景画等における線遠近法、空気遠近法、消失遠近法の導入と素材特性の関連について検証する。とくに空気遠近法の手法として、薄い重層、塗り込み、即興的タッチの三つに分類し、油絵具の使用法の差異を考察する。さらに、アントニオ・ロベスの制作法を取り上げて、空間描写として、対象と視点との距離を測り、緻密に計測し、形態を描写していく点、彩色における決まったプロセスはなく、明部と暗部に関わらず、重層回数は多い点を挙げている。

第四章では、対象の形式を実景、デッサンや素描、写真と三つに分類し、描き手の意図の所在や完成作品における現実性の度合いを検証する。対象が実景の場合、現実性の高さ、画面上での対象の大きさ、画面自体の大きさについて触れる。対象がデッサンや素描の場合、現実性は弱くなるが、描き手の意図や関心を付加する事が有効である。対象が写真の場合、写真の導入法を、第一に基盤となる描法や画題が決定していて対象を描写するために写真を活用する方法、第二に写真の映像を忠実に写しとる方法に大きく分類する。

第五章ではまず油彩画における描写法についての新しい方向性を示唆する。重要なポイントとして、描写の密度や質を高めていく方向、新しい視覚技術における視点の変化、絵画空間の構造を変化させる方法が挙げられる。対象の描写部分と色面の配置の方法、複数の視点を一つの画面に組み込んで空間を再構成する方法、マチエールによって空間的な効果を加える方法について、作例を挙げて、検証する。

結章では、自作における描写法について、制作手順を踏まえながら、考察を加えて、最後に以上の考察をまとめている。

## 審査の結果の要旨

油彩画に限らず、作品制作に関わる研究を進めるためには、まず研究主題についての明確な意識が必要である。その点で、著者の視点は描写法に絞られており、そこから議論が展開し、素材特性に配慮しながら、考察がなされ、一貫した論考としてまとめられている。

もとよりこの分野はいぜんとして未開拓な領域であり、制作者の立場からの先行研究の蓄積も十分ではないとはいえ、著者が誠実に自らに課したテーマに取り組んでいる姿勢は高く評価できる。

考察に際しては、描写法に関わる諸要素をきちんと整理して、そのそれぞれについて、素材特性の検証のためには作例を自ら制作して用意するなど、丹念なアプローチを行うだけでなく、バランスのとれた論述によって、議論を展開している。その結果、結章において、自作について正対して、その制作過程を客観的に検証し、さらに結論を述べる部分で、それまでの一般化・理論化のための論述が活かされている。

なお、審査に際して、本論文に係る資料として作品の展示が行われており、論文の必須の資料として熟覧し、成果を確認した。

以上から、本論文は、著者ならではの実践的な視点により、油彩画制作に関して独自の考察を加えた論文として高く評価できるものである。本論文により、著者の研究目的は概ね達成したといえるが、今後は、素材や技法の研究が進んでいる欧米の文献をより広範に渉猟して、その方面での考察を深めるとともに、制作においても、一層の精進を期待するものである。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。